

---

# 目覚め

寝猿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

田覚め

### 【著者名】

寝猿

N2046F

### 【あらすじ】

夜中にかかってきた電話。空が色づき始める時間に、僕は何かを求めて家を出る。

一人暮らしの殺風景な部屋に電子音が鳴り響いた。

始めは目覚ましの音だと思った。目覚ましといつても、携帯電話にある目覚まし機能を使っているだけで、実際この部屋に時計はない。東京の大学に入り念願の一人暮らしを始めたのが1年前。無駄なものは買わないようにした結果、目覚まし時計もその不要なもののリストに名を連ねることになった。部屋は友人に「生活感がない」と評されるほど綺麗に保つてある。もちろんその中には女性も含まれるが、同じ言葉でも女性の口から言い放たれるその言葉には、いぐぶん否定的なニュアンスが込められていた。無論、理由など僕には分からぬ。

音が鳴つてすぐに眼を覚ましたつもりだが、曲は中盤に差し掛かっている。これは映画で使われていたオーケストラの曲だ。着信だつた。電話は襲い掛かる海賊のように会話を迫る。それでも僕たちは携帯電話を手放すことは出来ない。われわれのコミュニケーションは携帯電話を無くしては成り立たない、と誰もが信じ込んでしまつていい結果だ。

音の鳴る方に手を伸ばしてみる。すぐにそれらしいプラスチックの質感に触れた。2年前の古いモデルだ。僕の回りで同じ携帯を2年も使うやつはいない。最新機種なんていつも何も変わらないことを僕は知っている。電話とメールがあれば十分な人間にとつて、携帯が進化していると実感する場面は少ない。

手にとつて見ると電話番号だけが液晶画面に浮かび上がつていた。登録していない誰かからの電話だ。バックライトが殺風景な部屋を静かに照らしている。

やれやれ、と思いながら電話に出る。「もしもし」

寝起きであるといつアピールするのに十分な返事だ、とわれながら感心した。

しかし相手は、そんなこと意に介していないような口調で言い放つた。

「時間がないの」

女の声だ。知ってるような気もするし、知らないような気もする。電話口から聞こえる女の声ほど苦手なものはない。僕はディスプレイに名前が表示されなければ誰の声か判別がつかない。それにただでさえ女性が何を考えているか読めないので、相手の表情すら見えないのだ。

今何時だっけ、という考えにやっとたどり着く。しかし部屋に時計はない。電話が塞がってしまえば時間は分からぬ。そんなに寝ていよいよだから、たぶん2時くらいだろうと見当をつけた。

「時間がないのよ、私たち」

女は繰り返した。その声には切迫感が感じられた。しかし呼吸は乱れていない。女は静かに、しかし確実に焦っている。声と声の間にあるのは、完全な沈黙だった。完全な沈黙は僕に完全な暗闇を想像させる。この女は自分の両手さえも見えないような暗闇から電話をかけてきているのだ。そして僕を引きずり込むとしている。

「分かった、会つて話そう」試しに言つてみたが、ひどく緊迫感のない声になつてしまつた。何となく事の成り行きに自分を任せていたい気分だった。寝起きで判断力が鈍つっていたのもあるだろ。

「海の見える橋に来て・・・ねえ、お願ひだから早く」彼女は早口で答える。僕はその答えにどきつとする。心臓の鼓動が速くなつたのを感じる。海の見える橋には心当たりがある。それは去年付き合つていた彼女との思い出の場所だ。しかし海の見える橋なんていくらでもあるし、この声は昔付き合つていた誰かの声ではない気がす

る。

「君は、誰？」僕が言つた瞬間、電話口から声にならない声が聞こえた気がした。

電話は切れていた。海賊は去つた。

多分間違い電話だろう、そんな事を考えながら出掛ける準備をしている。準備と言つても大した事はない。財布と免許証、バイクのキー、念のため予備のヘルメット。

「時間がないの」と彼女は言つた。そして「私たち」と。心当たりなど何もない。彼女の

「私たち」に僕は含まれていなければならないはずだ。電話の彼女は僕の知らない場所から僕の知らない誰かを求めているのだ。不幸にもその想いは彼女の知らない「僕」という誰かに届いてしまつた。しかし一方で、自分の心当たりがアテにならない事も知つてはいる。心当たりのないところで人は人を傷つけるものなのだ。特に僕においてその傾向は顕著である。過去の経験からするとそういうらしい。

ヘルメットで潰れると分かつてはいる髪型を、ワックスで整えるだけの時間は無さそうだ。僕は急ぎ足でアパートを出ると、駐輪場に停めてある愛車のキーを回した。機嫌が良ければいいが……

タタタタタ…と小気味良い音と鼓動が伝わる。よし、一発だ。愛車の機嫌はいい。夜中なので暖気はしない。僕はスタンドを戻してクラッチを切り、ギアを入れてすぐにスロットルを回した。

時折夜の生暖かい空気を裂くように冷たい風が全身を突き抜ける。風に乗せた鼓動は夜の静寂にリズムを打ち込む。暗闇をヘッドライトが切り裂き、後には赤いテールランプが踊る。夏は終わりに近付いていた。

思い当たる場所にたどり着いたとき、空は全体に青色を帯び始めた。誰かがテレビのカラーバランスの「B」をずっと右側に動かしたのだろう、と僕は想像した。少しづつ、だが目に見えるほど確実に。朝日というのは東の空から徐々に空を染めていくものだが、その予感とも言つべき変化は、今の今まで黒かつた空にも少し灰色がかかる雲にも平等に訪れていた。この世界で最も哀しい色を眺めながら一人朝を迎えるには、僕は少し年をとりすぎたのだろう。僕はまるで死刑を待つ罪人のように、迫りくる孤独に打ちひしがれ、行き場の無い寂しさが心を支配していた。リズミカルに響くスープーカブのエンジン音や、橋を往来する大小さまざまな車の音が目覚めたばかりの小鳥の声を遮り、世界が新たな一日の嘗みを始めたことを否応無く僕に実感させた。それは僕の孤独をよりいつそう募らせた。

そんなにせかすなよ、と僕は思つた。ここで誰かが、電話の主でなくともいいから誰かが僕を待つてくれさえすれば、と思った。そうすれば僕も新しい世界で新しい日々をスタートさせていたかもしないのに。そうすればいつまでも昨日という一日にしがみついて悲しい思いをしなくて済むのに。

やがて太陽が眠りから目覚め、夏の暑さを大地に降り注ぎ始めたころ、僕はその光から逃れるようにして岐路に着いた。ため息とあくびを交互にしながら、僕の心はまたひとつ深いところに沈み込んでいった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2046f/>

---

目覚め

2010年12月10日02時02分発行